地域資源を活用した総合的な学習の時間に関する組織的改善
－社会に開かれた教育課程の実現を目指して－

Organizational Improvements Related to the Period for Integrated Studies Utilizing Local Resources
－Aiming to realize Curriculum Open to Society－

横山亜希[1]，長倉 守[2]
YOKOYAMA Aki[1], NAGAKURA Mamoru[2]

［キーワード Keyword］　総合的な学習の時間，組織的改善，実践開発，社会に開かれた教育課程

［所　　属 Institution］　[1]郡上市公立小学校（Elementary School, Gujo City），[2]岐阜大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］　本稿の目的は、地域資源を活用し、総合的な学習の時間を中核に社会に開かれた教育課程の創造を目指した組織的改善に関する実践と検証を行うことであった。横山ら（2023）で得られた開発枠組みにもとづく開発実践により、実践の参考点として、フレキシブルな運用による校内組織の改善、研修や通信を活用した組織文化の醸成、児童の学びを基軸とした地域資源活用システムの構築、総合的な学習の時間に係る教育課程の整備を得た。検証データから枠組みや実践の有効性が認められた。これにより、継続的な教育活動の充実による児童の資質・能力の育成や全国的に同様の課題を抱える各学校の取組への貢献が期待される。

1. はじめに

学習指導要領や岐阜県、郡上市においては、総合的な学習の時間を中心に、地域資源を活用した学習の実施により児童の資質・能力を育成し、社会に開かれた教育課程を実現していくことを目指している。しかし、総合的な学習の時間については、その指導方法や校内体制の整備等の学校間格差、地域資源を活用したカリキュラム開発に課題があると学習指導要領においても指摘されている。実践校であるＡ小学校においても同様の課題を抱えている。A小学校は中山間地にある小規模校である。具体的には、カリキュラム改善を図る校内の仕組み、教職員の認識、積極的な地域資源の活用による教育活動の充実に課題がある。これらの課題に、校内組織やカリキュラムの整備、地域との対話と協働、地域と学校との計画の共有等、個別に取り組んだ先行研究があるが、これらの知見を統合的に援用したカリキュラムの組織的改善については検討の余地がある。

こうした現状と課題を踏まえ、横山ら（2023）では、Ａ小学校の実情に即した校内組織の構築と組織文化の醸成、地域資源とのつながりの構築、総合的な学習の時間のカリキュラムの改善について検討した。しかし、これらの検討にもとづく実践開発やその検証が課題となっていた。そこで本稿では、地域資源を活用した教育活動を充実させ、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、地域資源を活用した総合的な学習の時間の組織的改善に関する実践開発と検証を行うことを目的とする。これにより、Ａ小学校の教育活動の充実を通じた児童の資質・能力の育成や全国的に同様の課題を抱える各学校の取組への貢献が期待される。

２．枠組みに基づく実践開発の具体的状況

2.1 校内組織の改善

当初はカリキュラム改善を図る中核的な組織として、既存の研究推進委員会を位置付けていた。これは、A小学校の規模から新たなチームの立ち上げは困難であると考え、既存の研究推進委員会をコアチームとすることにより、過重な負担なく全職員によるカリキュラム改善の推進が可能であると考えたためである（図１）。研究主任を中心に学年主任と管理職から構成される研究推進委員会で、カリキュラムの改善に関わる全ての動きを創出しようとした。具体的には各学年部会で協議したことを研究推進委員会へ提案し、コアチームで検討していくという縦の関係を重視した組織の構築を目指していた。第一筆者は、図に示した教頭２

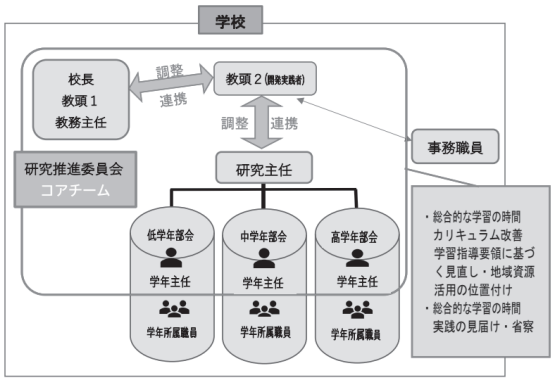

図１　校内組織改善の枠組み　横山ら（2023）

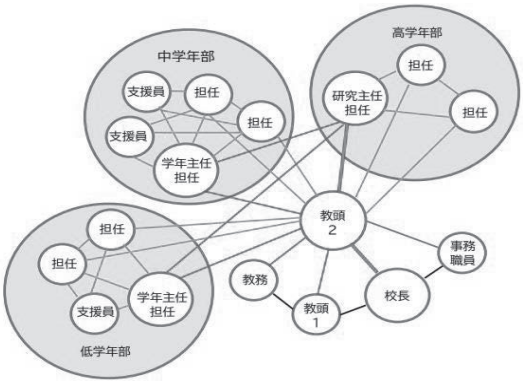

図２　校内の日常的な対話や交流の概念図

の立場で実践開発に取り組んだ。

しかし実際には、図２に示すように日常的な対話や交流の中で、実践の交流や学習の計画、実践の進捗状況の共有が図られた。特に、実際の学習活動やその省察において、当初考えていた組織よりも即時に対応することができ、担任の不安の解消や負担の軽減につながっていた。ただ、全体での共通理解や共有を図る必要があることについては、研究推進委員会で検討し、全職員へと伝える必要がある。よって、全体計画や全校研修の企画や運営については図１に示した組織での対応が必要である。一方、各学年の教育活動の様子や計画、地域資源の活用、年間指導計画の作成等については、図２のようなつながりの中で活発に協議されていた。したがって実際には、コアチームによる協議からの全校研究会と学年部をチームとする日常的な対話や交流との両方の組織の協議によって、カリキュラム改善が推進されたと指摘できる。

2.2 校内組織文化の醸成

校内組織文化の醸成については、全校研修会による全職員での学びの場の設定と日常の実践についての情報共有によって教職員同士の対話や交流を活性化し、教職員の総合的な学習の時間に対する理解を深め、授業実践の力量形成を図っていくことができると考えた。

2.2.1 全校研修会の実施

総合的な学習の時間は、教科書や具体的な指導内容が提示されていないにも関わらず、研修機会は少ない。そのため、教職員の不安感や負担感も大きい。そこで、全校研修の必要を感じ、その実施について検討した。

まず、年度当初に、外部講師による「今次の学習指導要領改訂の趣旨や総合的な学習の時間の重要性」に関する全校研修会を設定した。外部講師として、岐阜大学大学院教育学研究科の教員に依頼した。この研修によって、学習指導要領に基づいた今後の教育の方向性や総合的な学習の時間の意義、また、その特徴やカリキュラムづくりの重要性を学ぶことができた。この研修後の教職員の感想は次のようである。

- 教科だけでなく、総合が必要な理由がより具体的に分かりました。一人では考えても分からないことだらけなので、組み立てを助けてもらえると助かります。
- 総合についてほとんど分からない状態で初めて聞くこともあり、多くの収穫がありました。
- 児童と授業をつくりながら地域のことを自分も知って、「いいな」「楽しいな」という時間にできたらと思います。

一方、実際に授業として実践するためには、探究的な学習を展開するための手立てや単元構成、各学習過程の単位時間の構成など、実践に生かすことのできる具体的実践例やモデルについて学ぶことも必要だと考え、５月に２回目の全校研修会を設定した。ここでは、自校の全体計画と研究構想についての概要を説明し、教育事務所指導主事の講話の場を設定した。講話は「探究的な学習の展開」と「単元構成や各学習過程の単位時間の構成などの具体的実践例やモデルの紹介」であった。この研修後の教職員の感想は次のようである。

- 基本的なことから詳細な例まで示してくださり、「こんなことをしたいな」と思い浮かびました。
- 何から始めたらよいか迷っていたけれど、いろいろな課題設定の方法を学べたので、いろいろとやってみたいと思いました。
- やりたいことが増えてきました。活動の見通しが立ちました。

2.2.2 日常的な情報共有によって対話や交流を活性化する取組

先行研究では、指導部を立ち上げることにより相談体制を整えていたが、A小学校の規模ではそのような分掌を配置することは難しい。また、各学年単学級であり学年部での組織的な動きを生み出すことも困難である。そこで、他学年の実践やその様子について情報共有を行うことで、日常的な対話や交流の活性化を図ることができると考えた。そこで研修主任と連携し、通信を通じて活動予定や地域資源を活用した実践の様子等を紹介し、全職員で共有できるようにした。その通信（研推だより）は、次のようなものである。

「こんなふうにこんな学習がしていきたい！」をお伝えする会

○ 6月 16 日(木) 5時間目 14 時から　5年生
○ 6月 27 日(月) 5時間目 14時から　4年生
○ 6月 28 日(火) 5時間目14時から　3年生

今後の予定(現時点で決まっているもののみですが…)

【3年生】・社会科の学習ですが、6月29日(水) 桂昌寺、道の駅美並、子宝の湯の見学に行きます。
【4年生】・郡上市の社会福祉協議会に連絡を入れます。
・美並地域の社会福祉協議会主催の「家族の川柳」応募予定です。
【5年生】・「清流の国ぎふ環境養育推進事業」による講師派遣で森のなりわい研究所の伊藤栄一先生に来ていただきお話を聞きます。6月22日(水)14 時から 15 時半の予定です。
・カワゲラウォッチングに申し込む予定です。
【6年生】・「浸水疑似体験映像」等を活用した防災出前講座していただくことになっております。

今後も子どもたちの思いや学習の進み具合によってさまざまな体験活動やゲストティーチャーによる学びを入れていきたいと考えています。何か要望がありましたらご相談ください。

図３　研推だよりNo.４　（一部抜粋）

図３のように、各学年の総合的な学習の時間における地域資源を活用した学習の予定が他学年にも伝わるようにした。この通信により、学習や活動の予定が共有され、それぞれの学習の様子について参考にしたいといったことから、自主的に相互の授業を参観し合い、交流する動きへとつながった。予定を知らせた学習については、実施後にその様子を通信により全職員に紹介した。その通信は次のとおりである。

【3年生】6月29日(水) 桂昌寺、道の駅美並、子宝の湯の見学

森前先生が周到に準備され、半日で3か所のステキな場所を巡ることができました。(校長先生の事前のご挨拶もスムーズな見学につながったと思います。)子どもたちの学びは、教室後方の素敵な掲示に現れています。ぜひ、ご覧ください。

【5年生】6月22日(水) 森のなりわい研究所の伊藤栄一先生による環境講座

岐阜県でも自然は意外に少ないことがわかった。人の手が加わった方が生き物が住みやすいというのはすごく驚きました。(児童の感想)

図４　研推だよりNo.６（一部抜粋）

また、通信により、職員室で授業や児童の様子について協議・交流する場面も多く生み出すこととなった。このような協議の中から、学年部企画による地域講師の学習活動も実施され、探究テーマに応じてそれぞれの学年が別のねらいをもって取り組む複数学年による合同授業の実践へとつながった。

2.3　地域資源とのつながりの構築

上述のとおり、本校の規模では新たな担当者の配置やチームの立ち上げは難しい。そのため、教頭が校内と地域との連携の中心的役割を担うこととし、学校運営協議会会長(以下、会長という)を地域側の連携窓口の中心として、地域協力者との対話や協議を深め、目標の共有や地域資源とのつながりの構築を進めていくこととした。まず、この連携体制を意識し、年度当初の１回目の学校運営協議会において、総合的な学習の時間の全体計画を配付し、本校の目標や各学年の探究課題、育成を目指す具体的な資質・能力を地域と共有した。

2.3.1　学校と地域における連携窓口の連携調整

ここでは、学校側の窓口である教頭と地域側の窓口である会長との連携調整の実際について述べる。その内容は図５のとおりである。先行研究では、教頭からの働きかけについて整理されていたが、本実践では、図５に示すように双方向のやり取りによって学校と地域との連携調整が促進していった。連携調整の具体は次のようである。

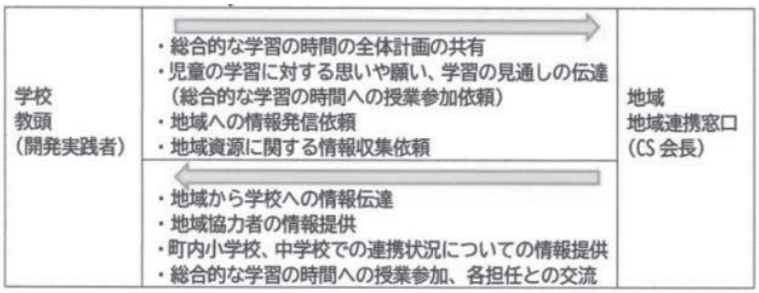

図５　学校と地域における連携窓口の連携調整の整理

４月には、総合的な学習の時間のスタートにあたり、第一筆者（以下、筆者という）から各学年の児童に、総合的な学習の時間で学ぶことや探究課題についてオリエンテーションを行った。それを受けて、どの学年も児童と担任により、各学年の探究課題に関わって１年間の学習を想定し、知っていることや知りたいこと、やってみたいこと、行ってみたいところ等、学習に対する願いを出し合った。そこでは様々な願いが表出されたため、児童の思いや願いを地域にも知ってもらいたいと考え、会長に以下のような提案を行った。

筆者：総合的な学習の時間のスタートにあたり、児童が地域をどう思っていて、どんな学習をしたいか考えているので、今度授業に参加して、児童の思いを直接聞いてもらえませんか。

この提案によって、各学年で児童の学習に対する願いや思いを伝える会が実施され、会長に子どもたちの声を直接届けることができた。この会の後、今度は会長から次のような提案があった。

会長：今度、地域協議会という会議があります。この会は、地域のいろいろな組織の会長さんが集まるから、そこでこの前聞いた児童の願いを話して協力を依頼しようと思って。あの子どもたちの願いをまとめたものもらえるかな。

会長は児童の願いをまとめたものと総合的な学習の全体計画を地域協議会で配付し、学校の地域資源の活用に向けた動きについて説明し、教育活動への協力を呼びかけた。さらに、児童の願いに基づいて、会長が協力を依頼できそうな地域資源に関する情報一覧を作成し、学校に提案いただいた。各学年の児童の思いと会長の情報について、筆者と会長とで協議し、地域に仰ぐ協力について検討し、共に協力相手を訪れ、児童の学習活動を想定し、協力を依頼した。この協議によって、各学年に関する地域資源についての情報が多く集まり各学年において学習活動が実現した。

2.3.2 学校と地域との目標や計画等、情報の共有による地域資源活用の基盤形成

地域との情報の共有においては、年度当初に改善を図った総合的な学習の全体計画と各学年の児童の学習に対する思いや願いを整理したもの等を用いるようにした。これにより地域資源活用の基盤形成を図った。地域の協力者による授業を行う際には、必ず全体計画と児童の願いについて整理したものをもとに打合せを行い、学校側の学習の意図を伝え、授業を構想していった。特に、児童の学習に対する願いを理解してもらうことは、実際の授業内容の構想に有効であった。児童の思いや願いについて、会長を中心に地域と共有することで、学習内容の幅が想定していたよりも広がることもあった。その一例を次に紹介する。

４年生の探究課題は「美並のやさしさを学ぼう(福祉)」である。令和３年度までの「障がい者・高齢者とその暮らしを支援する地域の仕組みや人々(福祉)」を受けた設定のため、当初は狭義での福祉に関する学びを想定していた。しかし、児童は「みんなのために動いている地域の人に会ってみたい、話を聞きたい」と

いう願いを出した。この願いに対し、会長からは公民館主事の方々の紹介があった。主事の方々から話を聞き、地域に対する思いに触れたことで、児童は自分たちも協力したいと、公民館主催のイベントについて全校に説明し、参加を呼びかけた。その結果、多くの児童がイベントに参加し、４年生は公民館の活動を盛り上げることに貢献し、主事の方や地域の方に大変喜んでいただくことができた。これまでは、公民館からのイベントのお知らせは多くの配付物と共に担任から配られ、児童も気に留めないことも多かった。しかし、公民館の活動について知り、主事の方々の思いに触れたことで、公民館の活動に興味をもち、その取組に参加しようという気運が生まれたのである。この学習により、児童は福祉ということについて広い意味でとらえ、自分たちも地域のために貢献できると気付く契機となった。そしてこの後については、高齢者体験や車いす体験、車いすバスケの体験等といった当初から想定していた学習だけでなく、地域のイベントを盛り上げている音楽サークルの方々の活動や思いに触れる学習へとつながっていき、「やさしさ」の捉えが広いものとなっていった。

学校としては、目標や計画について共有するだけでなく、活動の様子についても発信し、その取組についての情報共有に努めた。これまで同様学級通信や学校だよりでの発信に加え、今年度より導入された学校連絡システム「すぐーる」のタイムライン機能を活用して、保護者や学校関係者に児童の学習の様子をタイムリーに発信した。こうした一連の情報共有の取組は、児童の課題意識を反映した地域資源の活用とカリキュラム改善につながり、地域資源とのつながりの構築を大きく進めている。

2.4　総合的な学習の時間のカリキュラム改善

2.4.1　総合的な学習の時間の目標の設定

カリキュラムの改善について、特に、①各学校において定める目標、②目標を実現するにふさわしい探究課題、③探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力について検討し見直すこととした。

一つは、学校教育目標を踏まえた総合的な学習の時間の目標の設定についてである。定型があるわけではないため、適切な分量で学校が大切にしたいことを、次のとおり分かりやすい表現で盛り込むように考えた。

学校教育目標　「進んで　やりぬく子」

よりよく　　…よりよく考え、よりよいものを求め、判断し、表現する子

しんぼうづよく　…夢や目標に向かって、しんぼう強く行動し続ける子

みんなをだいじに　…いつでも誰とでも違いを受け入れ、互いを認め合う子

令和４年度の目標については、研究推進委員会での検討を経て職員会へと提案し、次のように設定した。

自分と地域(人、もの、こと)との関わりの中で、進んで課題を見出し、そのよりよい解決に向けて、みんなと協働的にやりぬき、しんぼう強く自己の在り方や生き方を考える態度を育てる。

2.4.2　探究課題の設定と育成したい資質・能力の明確化

次に、目標に沿った各学年の探究課題の設定と発達段階に応じた育成したい資質・能力の明確化である。探究課題の設定では、学習指導要領をもとに令和３年度のものを見直し、表３のように設定した。

表３　各学年探究課題の改善

学年	R3 探究課題(テーマ)	R4 探究課題
３年生	地域の防災と安全なくらし (防災)	地域のすてきを学ぼう (郷土)
４年生	障がい者・高齢者とその暮らしを支援する地域の仕組みや人々 (福祉)	地域のやさしさを学ぼう 高齢者等を支援する仕組みや人々 (福祉)
５年生	釜ヶ谷や身近な自然環境と、そこに起きている環境問題 (環境)	地域の自然を学ぼう 身近な自然・それを守る仕組みや人々 (環境)
６年生	円空や地域の歴史や文化と、その継承に力を注ぐ人々人々 (郷土)	地域の文化と安全を学ぼう 文化の継承や(郷土)や防災(防災)の仕組みやそれに関わる人々

「地域を知る」という大きな学校のテーマに対して、各学年ではどのような側面から地域を学んでいくの

か分かるよう、児童にも分かりやすい言葉で課題を設定した。

発達段階に応じた育成したい資質・能力の明確化としては、学校の目標が実現された際に表れる望ましい児童の成長の姿を示すものとし、教育活動を通して「どんな児童を育てたいか」について資質・能力の観点から明記するということに留意して見直した（表４）。

表４　令和４年度　総合的な学習の時間に育成を目指す資質・能力

探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力

<table>
<tr><th rowspan="2">学年</th><th rowspan="2">知識及び技能</th><th rowspan="2"></th><th colspan="4">思考力、判断力、表現力等（吉田小「学びのわざ」の活用）</th><th rowspan="2">学びに向かう力、人間性等</th></tr>
<tr><th>①課題の設定</th><th>②情報の収集</th><th>③整理・分析</th><th>④まとめ・表現</th></tr>
<tr><td>３年生</td><td>美並のよさや人々の思いを理解し、自分も大切にしようと行動する。</td><td rowspan="4">自分の意識や行動の変容は、探究的な学びの成果だと気付くことができる。</td><td rowspan="2">身近な課題を進んで設定するとともに、よりよい解決に必要な調査方法を明確にしながら、フィールドワークの計画を立てることができる。</td><td rowspan="2">人に聞いたり、図書館や ICT を活用して調べたりして、必要な情報を集めることができる。</td><td>集めた情報を比べ、分類し、表などを用いて整理することができる。</td><td>他教科の学びを生かし、相手に伝わるようにまとめることができる。</td><td>異なる意見や考えを知り、みんなと力を合わせて課題解決し、地域との関わりの中で、自分にできそうなことを見つけようとする。</td></tr>
<tr><td>４年生</td><td>美並の高齢者等の思いやその支援について理解し、自分も大切にしようと行動する。</td><td>集めた情報を表やグラフ思考ツール等を用いて分類・整理し、その特徴を見付けることができる。</td><td>他教科の学びを生かし、相手に応じて分かりやすく表現することができる。</td><td>異なる意見や考えのよさを知り。みんなと学び合って探究的な学習を進め、地域との関わりの中で、ねばり強く自分にできることを見つけようとする。</td></tr>
<tr><td>５年生</td><td>美並の環境やそれを守る思いや動きを理解し、自分ができることを行う。</td><td>地域社会に広く目を向け、進んで課題を見出し、よりよい解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てることができる。</td><td>多様な方法で自分の目的や意図に即した情報を収集し、種類に応じて紙面や ICT で蓄積することができる。</td><td>いろいろな思考ツール等を用いて、集めた情報を整理し、情報と情報の関係を考えることができる。</td><td rowspan="2">他教科の学びを活用して、目的に応じて手段を選択し、情報収集やまとめ等を行うことができる。</td><td>自分や他者のよさを生かして、みんなと協働して探究活動に取り組み、自分にできそうなことを見つけ実践しようとする。</td></tr>
<tr><td>６年生</td><td>美並の歴史や安全、それを守る思いや動きについて理解し、自分も大切にしようと行動することができる。</td><td>自己理解し、他者を尊重しながら、みんなと協働して問題解決に取り組み、地域に必要なことと自分ができることを検討し、ねばり強く実践しようとする。</td></tr>
</table>

各学年の探究課題を踏まえ、発達段階や実態に考慮し育成を目指す具体的な資質・能力を設定したことで、評価の観点としても活用できるものとなった。また、具体的な子どもの姿で設定したことで、活動内容を工夫し、資質・能力を育成していけるような授業を仕組んでいくことも可能となった。

2.4.3　目標の共有と段階的な計画の作成

教職員や地域の協力者で目標を共有し、当事者意識をもち、段階的に話し合い計画を練っていくことについてである。令和４年度は、カリキュラム改善の初年度として、実践に基づいて年間指導計画を作成していく段階である。地域の人的・物的資源の活用を積み上げたことで、各学年の探究課題に応じて、今後相談すべき地域の協力者も明らかとなってきた。令和５年度の始めに、さらに改善した全体計画や令和４年度の実践を基に作成した年間指導計画を共有して、地域の協力者と共に計画を練っていけるようにする。

3. 質問紙調査の結果と考察

本節では、質問紙調査の結果やインタビュー調査から、総合的な学習の時間の組織的改善についての効果を考察する。調査の概要については次のとおりである。

教職員対象の質問紙調査

・対象　　12人

・質問項目　総合的な学習の時間に関する認識　８項目

総合的な学習の時間に来する組織体制・組織文化　３項目

地域の教育資源に関する認識　12項目

総合的な学習の時間の実施状況　４項目

・実施日　　第１回　2022年4月　　第２回　2022年11月

児童対象の質問紙調査

・対象　　３年生～６年生　53人　（４年生～６年生　43人）

・質問項目　地域に関する認識地域との連携・協働に関する認識　12項目

総合的な学習の時間の取組に関する認識　４項目

身に付けた資質・能力に関する認識　　６項目

・実施日　　第１回2022年4月　　第２回　2022年11月

3.1 教職員質問紙調査の結果と考察

教職員を対象とした質問紙調査の４月と11月の各項目について、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。

3.1.1 総合的な学習の時間に対する認識

表１　総合的な学習の時間に関する認識

質問項目	4月平均値	＜＞ p	11月平均値	4月 SD	11月 SD
学習指導要領に対する理解	2.42	−	3.00	0.64	0.71
学習指導要領による学び	2.42	＜ *	3.42	0.76	0.76
研修などの学びの経験	1.67	＜ **	3.67	0.85	0.47
授業参観の経験	1.67	＜ **	3.75	0.75	0.43
学習の有用性に関する認識	3.25	−	3.67	0.60	0.47
授業づくりに関する意識	2.00	＜ **	3.08	0.82	0.49
学習の必要性に関する理解	3.08	−	3.67	0.49	0.47

*p <.05　** p <.01　−分析不能

総合的な学習の時間に対する認識については表１のとおりである。３項目において１％水準、１項目において５％水準で有意な差が見られた。この結果から次の二つが考えられる。

一つは、全校研修による教職員の学びの機会の設定、学習指導要領から総合的な学習の時間に関する事項を学ぼうとする姿勢の高まりである。これらは授業づくりに関する意識を高める基盤となった可能性がある。研修の成果については、教職員の省察記録にも次のように記述されていた。

・この研修によって、「地域と児童をつなぐ」というイメージを大切にすれば、出口が見えてくる気がしました。地域に住んでいるけれど意外と知らないことはとてもたくさんあると思います。地域を知り、自然を知る、その学びがいずれは児童の生きる力の礎になると感じます。

・教科だけでなく、総合が必要な理由がより具体的に分かりました。なかなか具体的にイメージはまだわかないけれど、この教科のこの単元のこの力が活かされていくという意識をもつことは大切だと感じました。地域について、自分も知るチャンスだと思って取り組んでいこうと思いました。

二つは、研修による意欲の高まりに伴い、通信や日常の職員室等での対話が生まれ、自発的に互いの授業を参観する積極的な学び合いの姿が見られたが、11月の平均値では「授業参観の経験」が最も高く１％水準で有意差があり、それを裏付ける結果が示されたことである。これに関連して、A教諭（３年担任）とB教諭（４年担任）、校長はインタビュー調査の中で次のように述べている。

A教諭：総合的な学習の時間の設定が、３年生から６年生まですべて同じ曜日の同じ時間に設定されていたため、参観しやすかった。どんなことをどんなふうにやっているのか、気になったので見に行くことができた。

B教諭：職員室で総合的な学習の時間のことが話題になると、どんなことを児童が学んでいるのかと気になって授業を何度かのぞかせてもらい、自分も楽しませてもらった。

校　長：みんなが同じ時間に実践しているため、まず実践しているという土台があり、お互いに何を学習しているかがわかっているため、どうやっているかという方法の交流が活発になされていた。

これらのことから、教職員の総合的な学習の時間に対する認識の高まりや情報の共有、実践の交流により、授業づくりに関する認識が高まったと考えられる。従前は比較的認識が不十分で、苦手としていた総合的な学習の時間の授業づくりに対して、肯定的な認識に変容したことはさらなる授業実践につながった。学びの場による情報や実践の共有により、積極的に学び合う姿が生み出され、担任の負担や不安が軽減し、さらなる実践への意欲に繋がったと考えられる。

3.1.2 組織体制・組織文化に関する認識

組織体制や組織文化については表２のとおりである。「組織体制の適切性」において１％水準で有意差が見られる。本実践開発では、学校の規模や実情に配慮し、無理のない組織を構築してきた。既存の研究推進委員会の取組としてカリキュラム改善や研修の実施、実践の見届けを行った。また、授業実践の検討では、

表２　総合的な学習に対する組織体制・組織文化に関する認識

質問項目	4月平均値		11月平均値	4月*SD*	11月*SD*
授業づくりに関する職員の交流	2.67	＜ *	3.67	0.75	0.47
組織体制の適切性	2.75	＜ **	3.75	0.60	0.43
教育活動実現のための情報収取	2.42	＜ **	3.58	0.64	0.49

*p <.05　** p <. 01　－分析不能

会議は設定せず、日常の対話や交流を大切にして情報共有や実践の改善を図ってきた。こうした営みの重視が、「授業づくりに関する職員の交流」の結果につながっていると考える。

また、「教育活動実現のための情報収集」においても１％の水準で有意差が認められた。これは、教職員の総合的な学習の時間に関する認識、職員間の情報共有、地域資源の活用に関わる情報収集等、目指す教育活動の実現に向けた様々な情報収集が進み、また情報の整理がなされた結果であると考えられる。

3.1.3 地域の教育資源に関する認識

表３　地域の教育資源に関する認識

質問項目	4月平均値	＜＞ p	11月平均値	4月*SD*	11月*SD*
地域の魅力に対する理解	2.42	＜ *	3.42	0.64	0.49
地域資源に対する理解	2.08	＜ *	3.08	0.64	0.64
地域協力者に対する理解	1.92	＜ **	3.33	0.64	0.62
地域の方との交流に対する意欲	2.50	＜ *	3.33	0.76	0.62
計画への地域資源の位置づけに関する意識	2.00	＜ **	3.33	0.71	0.74
コミュニティスクールの活用	2.00	＜ **	3.17	1.00	0.69
地域資源を活用した授業の実施状況	2.50	－	3.33	0.87	0.94
地域協力者の授業への協力状況	2.67	－	3.42	0.47	0.95
学習による社会貢献の状況	2.33	＜ *	3.08	0.62	0.49
地域資源の発掘・維持・管理に関する努力	2.25	＜ **	3.42	0.83	0.64
保護者や地域との情報の共有・協議の機会	2.17	＜ **	3.33	0.80	0.62
地域との協働の有効性に対する理解	2.67	＜ **	3.67	0.75	0.47

*p <.05　** p <. 01　－分析不能

地域の教育資源に関する認識ついての結果は表３のとおりである。「計画への地域資源の位置づけに関する意識」「コミュニティスクールの活用」「地域資源の発掘・維持・管理に関する努力」等の項目で１％の水準で有意差が認められた。地域の教育資源を発掘・活用した取組の成果が表れていると言える。

年度当初に児童の学習に対する思いや願いを会長に直接聞いていただき、その時の思いや願いをまとめたものを地域へと広げることや、それに基づいた会長からの紹介により地域とのつながりが生まれ、全ての学年での学習活動の充実につながった。さらには、活用した地域資源を計画に位置付けていくことで、今後いっそう円滑な地域資源の活用が期待される。C教諭（５年担任）は次のように述べている。

C教諭：地域の方は本当に児童のことを思ってくださっていて、「地域のよさや宝を味わってもらいたい」という強い思いをもってみえる。そんな方々に直接会って、気持ちに触れることは、児童にとって新鮮で、意味のある学びがある。でも、地域のことを全く知らない自分には、いつ、誰にお願いしたらよいのか、分からない。だから、できないでいた。地域の方の連絡先等が位置づいた計画であれば、地域のことを知らない自分にはすごくありがたい。

教職員との対話を踏まえると、このC教諭と同じように感じている教職員は多い。これは「保護者や地域との情報の共有・協議の機会」「地域との協働の有効性に対する理解」の項目で１％の水準で有意差が認められたことにも表れている。保護者や地域との情報の共有・協議の機会としては、総合的な学習の時間の全体計画や児童の思いや願いをまとめたものを機会あるごとに配付のうえ共有し、これらが児童の学習を共通の話題として新たな協力者の発掘につながった。また、情報の共有についても、通信だけでなく、授業参観や地域の夏祭りの展示、今年度導入した学校連絡システムの活用等、教職員や児童のアイデアによって、その方法が広がっていった。

地域資源を活用した学習を進め、学習したことを地域の方や保護者に伝える「Ａ小フェスタⅡ」を参観く

ださった学校運営協議会委員の方々は次のように述べている。

A委員：各学年の発表を見させていただき、分かりやすくまた楽しく、勉強にもなりました。いろいろと工夫して発表していただき、ありがとうございました。

B委員：どの学年も自分たちが学んだことを生き生きと誇らしげに発表している様子が伝わってきました。すてきな姿をたくさん見させていただき、私もあったかい気持ちになりました。

児童の学びを積極的に伝えることで学びが理解され、さらには地域からの情報も集まることが確認された。

3.1.4 総合的な学習の時間の実施状況に関する認識

表４　総合的な学習の時間の実施状況

質問項目	4月平均値	＜＞ p	11月平均値	4月SD	11月SD
学校の目標を意識した授業実践	2.08	＜ *	3.17	0.76	0.80
探究課題を意識した授業実践	2.08	＜ **	3.17	0.64	0.80
資質・能力を意識した授業実践	2.00	＜ **	3.42	0.71	0.49
探究の過程を意識した授業実践	1.92	＜ **	3.25	0.86	0.72

*p <.05　** p <.01　－分析不能

教職員の総合的な学習の時間の実施状況は表４のとおりである。「探究課題を意識した授業実践」「資質・能力を意識した授業実践」「探究の過程を意識した授業実践」の各項目において１％水準で有意差が見られ、「学校の目標を意識した授業実践」の項目では５％水準で有意な差が見られた。

学校教育目標を意識した総合的な学習の時間の目標づくりを行い、学年ごとに発達段階や実態を踏まえ探究課題や育成を目指す資質・能力について検討し設定した。活用可能な全体計画の作成が寄与したと考察される。また、カリキュラム改善に取り組み、計画を意識した授業実践につながった。さらには、改善した計画を地域へ広め共有したことで、地域資源を活用した授業実践の中でより意識されたと考えられる。

3.2 児童質問紙調査の結果と考察

児童を対象とした質問紙調査の４月と11月について t 検定を行った。総合的な学習の時間の組織的改善を図り、地域の人的・物的資源を活用した教育活動に関して、児童の認識への影響について考察する。

3.2.1 地域との連携・協働に関する認識

表５　地域との連携・協働に関する認識

質問項目	4月平均値	＜＞ p	11月平均値	4月SD	11月SD	t値
地域への愛着	3.60		3.64	0.68	0.59	0.45
地域の魅力に対する理解	3.74		3.81	0.52	0.44	1.34
地域との協働に対する好意	3.15	＜ **	3.66	0.79	0.55	5.57
校内での地域との連携・協働	3.25	＜ **	3.94	0.84	0.23	5.87
地域との協働による理解	2.85	＜ **	3.60	0.96	0.56	5.01
地域との協働に対する意欲	2.74	＜ **	3.28	1.08	0.76	4.61
登下校時における地域との交流	3.75		3.75	0.47	0.51	0.00
地域行事への参加の状況	3.34		3.55	1.03	0.69	1.48
学びの発信に対する意欲	2.85	＜ **	3.28	0.94	0.81	3.93
地域貢献に対する意欲	3.54		3.64	0.90	0.68	1.44
社会貢献に向けた行動の状況	2.26	＜ **	3.11	0.99	0.82	5.73
将来の社会貢献に対する意欲	3.11	＜ *	3.38	0.96	0.59	2.11

*p <.05　** p <.01　（３～６年　n＝53）

まず、地域との連携・協働に対する認識については表５のとおりである。12項目中、７項目について有意差が見られた。特に、「地域との協働に対する好意」「校内での地域との連携・協働」「地域との協働による理解」「地域との協働に対する意欲」「学びの発信に対する意欲」「社会貢献に向けた行動の状況」では１％水準で有意差が見られた。地域の方から学ぶ体験を通じて、児童にとり意欲の向上や理解の促進が推察される。また、児童の学びの状況について、教職員や運営協議会委員からは次の声があった。

B教諭：地域の方と共に実際に体験活動を行ったことで、児童は自分たちの学んだことに自信をもち、意欲的に発表することができた。実際に人と出会って、その気持ちに触れることは子どもたちの学びにとって大きいと感じた。

C委員：自分たちで工夫してとてもたくさんの準備がしてあり、びっくりしました。教室の入り口から黒板に至るまでとても手間がかかっていて楽しめました。家の人から、家でもたくさん練習したと聞きましたが、発表もとても上手でした。

今後の課題として、さらなる地域との連携・協働に向けて、学びを発信する場や学んだことを生かして貢献する場について検討していきたい。

3.2.2 総合的な学習の時間を通して身に付いた資質・能力に関する認識

表６は、児童の資質・能力に関する自己認識についての結果である。４月の段階で総合的な学習の時間の経験がない３年生は除外しているため、４年生から６年生の43人についての結果である。

表６　身に付いた資質・能力に関する認識

質問項目	4月平均値	＜＞	p	11月平均値	4月SD	11月SD	t値
知識・及び技能	1.86	＜	**	3.35	0.88	0.61	9.66
思考力・判断力・表現力等　①課題の設定	1.35	＜	**	3.05	0.48	0.78	11.85
思考力・判断力・表現力等　②情報の取集	2.49	＜	**	3.56	1.23	0.69	5.13
思考力・判断力・表現力等　③整理・分析	1.95	＜	**	3.40	1.26	0.72	7.01
思考力・判断力・表現力等　④まとめ・表現	1.95	＜	**	3.35	0.89	0.77	8.56
学びに向かう力・人間性等	1.74	＜	**	3.00	9.94	0.86	7.29

*p <.05　** p <. 01　（４～６年　n＝43）

ここでは、６項目すべてにおいて１％水準で有意差が見られた。これも全体計画の改善を図ったことによるものが大きいと考察する。各探究の過程ごとに、各学年の発達段階や児童の実態に即した資質・能力の設定により、目の前の児童の目指す姿が明確になり、その姿を意識して学習活動を仕組むことができた。このような教員の意識の変容によって、児童もどんなことができたらよいかという目指す姿を具体的にイメージし、目標をもって学習に取り組んだため、学習の成果を認識できたと考えられる。総合的な学習の時間について教職員が学び、カリキュラム改善に取り組んだことは、教育活動を充実させ、児童の学びの充実につながったと考察できる。

本実践開発を通じて地域資源を活用した授業実践を重ね、その実践をもとに、地域の人的・物的資源の活用を明確に位置づけた年間指導計画を作成してきた。そのため、今後はこれを基に、さらに探究のプロセスや他教科との往還を意識したカリキュラム改善に取り組んでいく必要がある。よって作成した計画は、完成ではなく、その時の児童の思いや願いに沿ったものとなるよう再検討し、改善しながら実践していくものであるというように考え、計画通りに活動させていくことが目的とならないように留意しなければならない。

4. おわりに

本稿の目的は、地域資源を活用し、総合的な学習の時間を中核に社会に開かれた教育課程の創造を目指した組織的改善に関する実践と検証を行うことであった。横山ら（2023）で得られた開発枠組みにもとづく実践開発により、検証データから枠組みや実践の有効性が認められた。これにより実践の参考点として、小規模校の特性を踏まえたフレキシブルな運用による校内組織の改善、研修や通信を活用した組織文化の醸成、児童の学びを基軸とした地域資源活用システムの構築、総合的な学習の時間に係る教育課程の整備を得た。総合的な学習の時間の実施に関する地域や学校間の差については、課題として長く指摘されている。本稿の成果により、組織的改善を通じた継続的な教育活動の充実による児童の資質・能力の育成、地域資源の活用等、同様の課題を抱える各学校の取組への貢献が期待される。

参考文献

横山亜希・長倉守（2023）社会に開かれた教育課程の実現を目指した総合的な学習の時間の組織的改善に関する検討－中山間地域の人的・物的資源の活用による教育活動の充実に向けて－岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学 72 (1)、pp.203-211

謝辞　本研究はJSPS科学研究費（課題番号：22K13706）の支援を受けたものです。